



2021

年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大学工業高等専門学校 公開日: 2024-02-02 キーワード (Ja): ティーチング・ポートフォリオ, 教育改善, メンティー, メンター, スーパーバイザー, オンラインワークショップ キーワード (En): 作成者: 土井, 智晴, 井上, 千鶴子, 谷野, 圭亮, 稗田, 吉成, 鯨坂, 誠之, 野田, 達夫, 東田, 卓, 北野, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/0002000284">https://doi.org/10.24729/0002000284</a>

# 2021 年度ティーチング・ポートフォリオ 作成ワークショップ開催報告

土井智晴\*1, 井上千鶴子\*2, 谷野圭亮\*2, 稗田吉成\*2,  
鯨坂誠之\*3, 野田達夫\*4, 東田卓\*4, 北野健一\*2

## A Report on the Workshop of Teaching Portfolio in 2021

Tomoharu DOI\*1, Chizuko INOUE\*2, Keisuke TANINO\*2,  
Yoshimasa HIEDA\*2, Shigeyuki AJISAKA\*3, Tatsuo NODA\*4,  
Suguru HIGASHIDA\*4 and Ken'ichi KITANO\*2

### 要旨

大阪公立大学高専は、2009 年 1 月に全国の高等教育機関で初めて学内・対面でティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催した。その後、毎年 2~3 回のワークショップを対面で開催し、教育改善に取り組んできたが、2020 年から始まった新型コロナの流行により、対面でのワークショップ開催は断念せざるを得なくなった。そこで同様のワークショップをオンラインで開催できないか模索し、2020 年 12 月に日本初となる第 24 回ティーチング・ポートフォリオ作成オンラインワークショップを開催した。本稿では、2021 年度に開催した第 25・26 回のワークショップの概要について、ワークショップ参加者の報告による教育改善効果の考察と検証を報告する。

**Key Words:** ティーチング・ポートフォリオ, 教育改善, メンティー, メンター, スーパーバイザー, オンラインワークショップ

### 1. はじめに

大阪公立大学工業高等専門学校(以下、本校と略す)は、2009 年 1 月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ(以下、TP と略す)作成ワークショップ(以下、WS と略す)を開催した[1]。以後本校 TP 研究会は年 2 回(2011 年度は 3 回)の WS を開催し、TPWS による、より効果的な教育改善の研究に取り組んできた。2022 年 6 月現在、副校長を含めた常勤教員 65 名中 52 名(80%)が TP を作成している[2]。本稿では、2021 年度に開催した第 25 回および第 26 回 TP 作成 WS(オンライン)の概要について記した後、参加したメンター、スーパーバイザーおよびオンラインサポートを担当した者の感想と考察を記す。なお TP についての詳細、特徴等について

は、既報[1][2]ならびに書籍[3][4]を、オンライン形式 WS の詳細については参考文献[5]を参照されたい。

### 2. ワークショップの概要

参加したメンティーとメンターの人数は、表 1 の通りである。日程は、第 25 回が 2021 年 9 月 6 日~8 日、第 26 回が 2021 年 12 月 26 日~28 日である。第 25 回、第 26 回ともアカデミック・ポートフォリオ(以下、AP)作成 WS(第 18 回、第 19 回)と同時にオンライン形式で開催した。内容はオリエンテーションの後、メンティーは数回のメンターとの個人面談(メンタリング)を交えながら TP を作成する。一方、メンターはメンターミーティングでメンタリングの進め方の報告と検討を行っている。簡単なスケジュールを表 2 に示す。メンターミーティングを統括するスーパーバイザーは、本校の井上(第 25 回)、東京大学の栗田佳代子氏(第 26 回)、本校の鯨坂(第 26 回)が担当した。

TP は高等教育機関を中心に広がっているが、初等・中等教育の教員でも作成することは可能である。これまでに小学校教員 2 名(2018 年度 1 名、2019 年度 1 名)、高等学校教員 2 名(2017 年度 1 名、2020 年度 1 名)が本

2022 年 8 月 31 日 受理

\*1 総合工学システム学科 知能情報コース

(Dept. of Technological Systems: Intelligent Informatics Course)

\*2 一般科目系 (General Education)

\*3 プロダクトデザインコース (Product Design Course)

\*4 エレクトロニクスコース (Electronics Course)

校WSでTPを作成されている。

なお、本校のWSは、2013年にティーチング・ポートフォリオ・ネットワークが公開したTPワークショップ基準を満たしている。

表1 開催したWSの参加者

実施回	メンティー		メンター		スーパーバイザー	オンラインサポート
	本校	他校	本校	他校	本校	本校
25	2名	2名	1名	3名	1名	2名
26	0名	10名	5名	5名	2名	3名

表2 TP作成オンラインWSの主なスケジュール

	第1日	第2日	第3日
午前	オリエンテーション チャート作成	個人メンタリング(3) TP作成作業	個人メンタリング(5) TP作成作業
午後	個人メンタリング(1) TP作成作業 個人メンタリング(2)	中間発表 TP作成作業 個人メンタリング(4)	TP作成作業 プレゼン準備 TPプレゼンテーション 修了式
夜間	意見交換会 TP作成作業	TP作成作業	修了を祝う会

### 3. メンターを担当して

#### 初メンター参加を通じて自分を振り返る(野田達夫)

2021年12月に開催されたTPWSに初めてメンターとして参加した。2013年8月にTPを執筆[6]して以降、1日だけの“TP更新WS”へ参加することは何度かあったが、3日間に渡る“TP作成WS”へは8年ぶりの参加となった。TPを執筆後にメンターのお誘いを頂いたことはあったものの、他の業務と日程の重なりがあって参加は実現せず、私からすればTPWSはすっかり遠い存在になりつつあった。そんな中、ひよんな出来事から「メンターやらない？」とお声掛けを頂き、今回の初メンター参加へと至った。

これも何かの縁かと思い、特に深く考えず二つ返事で「いいですよ」とメンター参加を引き受けたが、開催日が近づくにつれ「そもそもTPWSってどんなことやってたっけ?」「自分がメンティーの時はどんな雰囲気だったっけ?」と思いつく作業に追われることとなった。過去のTPWS開催報告[6]に掲載された自分自身の文章も読み返し、当時メンターに支えて頂いたこと、自分が考えていたことを思い出すと同時に、「日々の業務をただただ遂行することに重きを置き、その一つ一つを流してしまっていないか」という言葉が、今の自身への盛大なブーメランとなって心に刺さったような思いがした。

そして迎えたTPWS当日。この3日間は他の業務をいっ

たん忘れて、目の前のことに心をしっかり込めようと思い臨んだ。ベテランのメンターであれば、深掘すべきポイント、的確なアドバイスをメンタリングの場で提示されるだろうが、メンターデビューの私には到底できないと早々に諦めていた。今の自分にできることをしっかりやろうと思いながら、「どういう経緯で〇〇に取り組むことになったんですか?」と興味が向くままに問いかけながら、「お話を聞いてわくわくしてきました」と勝手に盛り上がり、終いには「こんなTPが読みたいですね!」と無茶ぶりをする始末。付き合わされたメンティーにはどのように映っていたか、今更ながら気になっている。

最終日のメンティーの発表は、私の想像をはるかに超える素晴らしいものであった。スライドがZoom画面越しに表示された瞬間、「これはすごい!」と思わず感嘆の声をあげた。メンターに茶々を入れながらも、自身の“教育”にぐっと向き合い続け、3日目にその想いが一気に形を成したように見えた。一意専心の姿勢で取り組み、メンティーが自らの力でつかんだ成果であると思う。我が身を振り返ればどうか。この短い文章を書き終えるまでにも、そわそわと何度も手を止めている。今一度、初心を思い出そう。そう思ったTPWSであった。

#### TPメンターを経験して(谷野圭亮)

今回のTPワークショップは私にとって2度目の遠隔での参加となった。前回は自宅からの参加であったが、今回は職場からの参加であった。これまで対面の場合は職場で実施されていたことから今回の参加はコロナ禍前の状態に少し近い心持ちであった。他のメンバーも遠隔実施に慣れてきたようで、メンター同士はブレイクアウトルーム上で以前の対面実施の頃を思い出させるような非公式の情報交換が頻繁に行われた。対面実施時の重要な点として、メンターやメンティーの間のスケジュールにならない(茶菓をつまみながらの)交流があったが今回はそれが復活してきたように思えた。このような非公式の交流を意図的に行うことは難しく、全体的に学会や講義を通して遠隔対応に慣れが生じてきたこととコロナ禍前に人間関係が構築されていたことが考えられる。今後、遠隔でのワークショップが増えることが予測されるが、TPのようにメンターとメンティー、メンターグループ内の人間関係がモノを言う性質のワークショップの場合は遠隔システムへの慣れと、ホスト側の連携が重要である。これまでの遠隔対応でのTPワークショップを経て今後、新しい組織やメンバーでワークショップを開催する際には初回は対面で行うなどの対策が必要であろう。

また、今回メンターとしてTPの作成に協力した方は工

学がご専門でありながら、教育の方法やモデルにも精通しておられ多数の実践経験をもっておられる方であった。膨大な量の実践経験を持っておられ、今回でそれを纏め切るのは非常に骨の折れる作業であったが、学生のアンケートや到達度試験の結果も保存されており、それだけでも新しい研究になりそうであった。特に今回のケースでは「同僚としての教員」「(学生から見た)教員」「組織の中での教員」と、働く上で様々な立場での教員のあり方について多く考えることのあるメンタリングであった。コロナに振り回されて2年目のWSであったが、最後に一言「そろそろ榮華亭の冷えたビールを飲み、鯖サンドを食べながら情報交換会がしたい」。

#### TPのメンターを経験して（東田卓）

今回のメンティーは医学部の先生であり、かつ、大学のセンターで医学教育の管理をする立場の先生であった。これまでは看護の先生のメンターやスーパーバイザー、またプレゼンテーションを聞く機会は大変多かったが、医学部の先生にお会いするのは初めての機会であった。たぶん本校のワークショップでも初めての受け入れと思われる。また、コロナ禍の中、オンラインでのWSでメンタリングがうまくいくかの懸念もあった。スタートアップシートが大変熱心に書かれていたため、むしろ書きたいことが多すぎて、あまり大きなリフレクションをされずにTPが書き上がってしまうのではと心配した。

看護の先生の場合は看護師として病院に立ち、また学校に戻って学生を教えるお立場である機会が多く、その話を聞く機会が何度かあった。医学部でも同様にある時は医者として患者に向き合い、そして教員として医学生に教える場合の苦悩などをお話頂いた。最終的に、医師国家試験に通らないとどうしようもないので、ともすれば医師国家試験の予備校にならないか懸念される中、教育のさまざまな取組をされていることがよくわかった。また、大学の医学部の実態を聞くことができ大変勉強になったほか、個人メンタリングで過去を振り返りながら思う存分話していただき、教育に関する悩みを吐き出していただく事により、TPで大きなリフレクションが感じられた。さらに、医学生は頭がよく、手技がうまいだけではだめで、やはり医者として患者に向き合う姿が重要であることをお話し頂き、医学部での教育の熱を感じる事ができた。

教育もメンタリングも一期一会である。どのようなメンタリングをするのが良いか、今回はうまくメンタリングできたのかがいつも気になるが、最後のお礼のメールを頂いていつもほっとしている。新型コロナウイルスの

蔓延で医療現場が大変な中、TPをご執筆いただき頭が下がる思いでいっぱいである。是非、次はAPを執筆したいとおっしゃられたことが大変嬉しかった。コロナ禍が落ち着くのはいつかわからないが、是非、本校のAPWSに参加していただきたいと願っている。

#### 2021年夏・冬のWSでメンターを経験して（稗田吉成）

2019年冬のWSで初めてAPのメンターをさせてもらいましたが、2021年夏・冬に2回続けてTPのメンターをさせてもらいました。メンターをするときには自分がメンティーのときにさせてもらった貴重な経験を、自分のメンティーにしてもらえるか不安になりますが、スーパーバイザーがいてメンターミーティングがあるというシステムのお陰でいつも大きな安心感を得ています。ただし今回はコロナ禍の影響も考慮してオンラインWSというスタイルでしたので、メンタリング・メンターミーティングもオンラインということは気になることでした。特にメンタリングに関してはメンティーとはその場が初対面となるので、学校のオンライン授業とも違った緊張感がありました。実際、2021年夏のWSではメンタリングはできてもそれ以外に直接ドアを開けて声がけすることができないことやメンティー側の通信環境もあって直接顔を見ながら話ができる時間にも制限ができてしまうなどありました。また2021年冬のWSではこちらの通信環境に問題が起り、スムーズなやりとりができないというトラブルもありました。しかしいずれも2020年にすでにオンラインWSを経験しておられた皆さんのお陰で、対応することができました。

逆にオンラインによるメリットとして、2021年冬のWSではスーパーバイザーによるオンラインならではの新たな試みもあり、これまでとは違ったメンターミーティングの活用方法も経験できました。

結果としてオンラインであっても今回もメンティーの考え方を学び、スーパーバイザーや他のメンターの考え方も聞かせてもらって、自分にとっては貴重な経験ができました。毎回ですがメンティーにとってよいメンターであったかは定かではありませんが、このTPWSでの経験を通して、お互いがさらに前に進める力を得られたと信じています。

#### 4. スーパーバイザーを担当して

##### スーパーバイザーを経験して（鯨坂誠之）

これまで何度かメンターを経験する中で、今後、スーパーバイザー（以下、SV）を引き受けることになった場合を

想定して、準備できることはないだろうかと考えることがあった。私の場合、人の話を聞いて瞬時にコメントすることがあまり得意ではない。どちらかという、人から聞いた内容を図や表などに整理してビジュアルにイメージしたほうが理解しやすく、また、そのイメージをもとにコメントすることが得意であった。

そこで2018年のTPWSから、メンターミーティングの際に他のメンターが発言している内容をメモしつつ、ビジュアルに表現するための独自のシートを準備して臨むことにしていた。そのシートはもともとTPWS用に用意されている既存の「Individual Record Sheet (以下, Sheet)」をアレンジしたもので、Excelで入力するタイプに変更しており、かつ、各項目の関係性が可視化されやすいようにその配置を工夫してある。また、既存版は複数ページにまたがっているが、私はA3用紙1枚でまとめられるよう改良し、一覧性を高めている。

この度、2021年冬のWSで初めてSVを経験させて頂いたが、この「改良版Sheet」を使用してメンターミーティングに臨んだ(図1)。

SVは、まず、TPWSが始まる数日前の時点でメンター全員のスタートアップシートに目を通さなければならない。今回は、5名のメンターの情報を頭に入れなければならない。文字ばかりのスタートアップシートを読んでいると、そのうち、ある内容が誰の内容であるかが分からなくなることがある。私の読解力や記憶力の問題でもあると思うが、5名のうち類似する内容を複数人が語っている場合などは混乱が生じやすい。ところが、改良版Sheetに情報を整理しておくと、誰の、どの内容が、どの項目で語られているものなのかが、可視化されているため、混乱が生じにくかった。

また、スタートアップの段階で整理しておけるため、実際にTPWSが始まってからも、メンターミーティングの際に混乱することもなかった。

さらに、ペン・タブレットによる端末を活用することで、他のメンターから指摘されたコメントを手描きで追記したり、ミニワークでメンターが作成した構造化シートを画像として張り付けて差異を確認したりすることも容易であった。加えて、5名の改良版Sheetを並べて俯瞰することで、メンターに対して共通してアドバイスすべき点と個々にコメントしたほうが良い点などが、自然と見えてきた。

おそらくベテランのSVや、もっと要領の良い人などは、このようなことを頭の中で難なくこなしているのではないと思う。その意味では、この改良版Sheetは初心者向きで、要領の悪い人向きなのかもしれない。

図1 改良版 Individual Record Sheet

改良版 Sheet はデータで提供可能なため、今後、SVの経験を想定している方は、お声がけ頂ければ幸いです。

## 2年目のオンラインWS (井上千鶴子)

オンラインWSも2年目に入り、多少は慣れてきたと言えるだろうか。2021年度は第25回ではSV、第26回では高校教員のメンターを務めた。

昨年度の紀要の拙稿を読み返すと、オンラインWSの短所として2点を述べている。「担当以外のメンターと関われない」「担当メンターにメンタリング以外でちょっとした声掛けがしにくい」。よく遠隔会議について言われる、「雑談のようなインフォーマル・アンオフィシャルなコミュニケーションから生まれる成果が得にくい」ということが、ここでも当て嵌まっていた。メンターの側から言えば、他の参加者との交流が少ないということになるだろう。対面で実施していた時には、担当以外のメンターと話したり、同じ立場のメンターと話したりすることで気づきを得られた、ブレイクスルーが得られた、といった感想がよく聞かれたが、そうしたことがしにくくなっていた。

2021年度のWSでは、1日目の終わりの意見交換会と2日目のお昼の意見交換会に工夫が施された。1日目の夕刻の方は時間が遅いになるべく参加してもらうようにし、Zoomのブレイクアウト機能により少人数グループで感想

を交換する時間を設けた。2日目の方は、対面の時から昼食会を兼ねて進捗や感想を述べてもらっていたが、時間や内容を厚くし、少し詳しく中間報告をしてもらった。Zoomでは、大人数だと発言するのに勇気が要る（人が多いと思う）。1日目であればメンティーはまだゴールが見えず不安を抱えていたり方針が立たずに迷っていたりしていることが多く、夕刻の意見交換会はそうしたことを分かち合っただけで不安を軽減する目的があるが、少人数グループにすることによって感想や悩みを率直に言いやすくなっていったように思う。また2日目の中間報告は、担当以外のメンティーの話を直接聞けることがよかったと思う。その後のメンターミーティングで、前夜の少人数グループでの会話や、中間発表での述懐について、メンター全員で多角的に検討することができたことが私のノートに残っている。個別のメンタリングや文章で見ていた内容の、言わば点が線につながるような感覚があった。「担当メンティー以外の人との関わり」からの効果は多少なりとも得ることができたと思う。

その他、個別のケースについて、備忘録的に述べておく。高校の先生のメンターは2度目だが、今回も充実した経験ができた。前回は若い先生、今回はベテランの先生だった。教育経験の豊富な先生は実践を精選するのに苦労されることが多く、今回もそうだった。どのメンティーの場合も、教育理念を整理することが一番の仕事だ。「ご自身は〇年後どんな先生になりたいですか」「教えている学生（生徒）にどうなってほしいですか」などと問いかけることが多いが、この二つは同じではない。両方に答えることの出来る先生は、どちらの切り口で書いていくかで、また一悩みされる。加えて、今回のメンティーは、周りの同僚や学校、教育界をも変容させたいという理想を持っておられたので、どこまでを視野に入れた理念にするか、随分悩まれた。どこを終着点とするかはメンティーが決めることで、メンターはそれを手伝うだけだが、いずれの結論になってもご自身がそういった視野を持っているということを見発されたと思えば、少しはお役に立てたかと思う。

本校は自校WSを続けているが、メンターとメンティーの組み合わせは専攻分野の近い人や普段から親交のある人は避けるようにしている。しかしメンターチームには、分野の近い人、親交のある人が存在する。その人たちは、担当メンターが理解しにくいメンティーの言葉を時に翻訳してくれる存在で、あまり具体的には書けないが今回も大いに助けられた。自校WSを検討しておられる教育機関があれば、そういうメリットもあるとお伝えしたい。

オンラインでのWSは発展途上である。2021年度のプロ

グラムが良かったのかどうかは、メンティーの感想も聞いてみないとわからないが、手応えは感じることができた。

## 5. オンラインサポートを担当して

### 裏方仕事のひとつではあるが、不確定要素が大きく疲れが大きい（北野健一）

このWSについては、2009年1月に第1回を開催して以降、毎回、コーディネータとして、裏方仕事を行ってきた。すなわち、WSの広報、テキストの発送、メンター・スーパーバイザーの確保と謝金・旅費の手配、個人メンタリング等で必要な多数の部屋の確保、プリンター・ノートPCの手配、ネットワーク接続に必要なゲストアカウントの発行依頼、電源ドラムやクーラーボックスの確保、昼食弁当・情報交換会の予約、飲食物の買い出し、修了証の作成、アンケートの集計等である。

しかし、2020年コロナ禍となり、WSがオンライン開催となってから、コーディネータの業務が一変した。上記のうち、「個人メンタリング等で必要な多数の部屋の確保、プリンター・ノートPCの手配、ネットワーク接続に必要なゲストアカウントの発行依頼、電源ドラムやクーラーボックスの確保、昼食弁当・情報交換会の予約、飲食物の買い出し」が不要となり、その代わりとして、「Zoom（含むブレイクアウトルーム）・グループウェアの設定・立ち上げやGoogle Classroomの設定、WS中のネットワークトラブルの対処」が新たに業務として加わった。

「 」内を単純に比較すれば、オンライン開催により、業務が減ったように見えるが、最後のネットワークトラブルの対処業務が曲者である。すなわち、ネットワークトラブルはいつ発生するかわからないため、WS開催中は常に気を抜くことができず、大変疲れてしまう。共同ホストがいない時に、ホストの回線が落ちてしまうと、皆さんに迷惑がかかるため、常時、私と本校教員の誰かが「ホスト」と「共同ホスト」になるように、複数でオンラインサポートの業務にあたっている。

このオンラインWSには欠かせないが、大変な業務であるオンラインサポートを引き受けてくれた土井教授、古田准教授にお礼を申し上げて筆をおく。

### オンラインWSであればこそ（土井智晴）

2020年から始まった新型コロナウイルス感染症のため本校では日本初のオンラインによるTP作成WSを開催した。そのオンラインWSの開催に際して生まれた分担がオンラインサポートである。私は近年、長期休暇期間中もWSの日程に合わせて3日間連続してメンティーと向き合える時間を確保することが難しく、TPWSに関わりにくくな

っていたが、オンライン形式のWS開催になったことで、オンラインサポート担当として、WS開催に協力ができ、とてもうれしく、WS開催を重ねる毎にTPの輪が広がっていくことを間近に垣間見ることができ、私自身の気づきの機会にもなった。オンラインWSはとてもメリットの大きい開催手法であることが2年を経て感じる。しかし、残念なことは、メンティー同士が執筆中の苦行を共にする物理的な空間共有ができない点である。昨今、流行しているメタバースや5G技術が進化し、そのような空間でオンラインWSが開催されることを期待している。

## 6. おわりに

以上、4名のメンター、2名のスーパーバイザーおよび、2名のオンラインサポートの報告と考察を掲載した。

本校のWS開催も10年を経過しTP作成WSは第30回も視野に入ってきた。本校内のTP執筆率が高いことは、ICT/DX等を活用できる高度な技術者育成や幅広い視野をもった人権教育を迅速かつ組織的に進められる推進力の一助になっていると考えている。この本校の特長的な教育活動が外部の教育研究機関の方々も巻き込みながら、持続的に発展することを信じている。

## 謝辞

本研究はJSPS 科研費 17K01001, 20K12094 の助成を受けたものです。

## 参考文献

- [1] 北野ほか: 日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して, 大阪府立高専研究紀要, 第43巻, pp. 63-70(2009).
- [2] 北野ほか: 第2回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告, 大阪府立高専研究紀要, 第44巻, pp. 57-64(2010). 以降第55巻まで毎年報告を掲載している
- [3] 大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会編著: 「実践 ティーチング・ポートフォリオスターターブック～実質的な教育改善活動を目指して～」, NTS出版(2011).
- [4] ピーター・セルディン著, 大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳: 「大学教育を変える教育業績記録」, 玉川大学出版部(2007).
- [5] 北野ほか: 日本初ティーチング・ポートフォリオ作成オンラインワークショップを開催して, 大阪府立大学高専研究紀要, 第55巻, pp. 31-38(2021).
- [6] 井上ほか: 2013年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告, 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要, 第48巻, pp. 43-48 (2014).